

森鷗外と『金瓶梅』

阮毅

要旨

『金瓶梅』は、明の万暦年間中頃に書かれた長編小説である。正保元年に日本に入り、儒者の間に流行した。優れた漢学素養をもつ森鷗外が、その『金瓶梅』にいかに関与され、また、どのようにそれを作品創作に生かしたのかを考えるのが小論の目的である。

三好行雄氏をはじめとする先行研究では、森鷗外の『雁』と『金瓶梅』のかかわりを、西門慶、潘金蓮、武大郎三者の関係を岡田、お玉、末造の関係に見立てているが、そこから一步踏み込んでの研究はされなかった。果たして、それは「見立て」の関係であるかどうかを考えなければならぬ。小論は鷗外のその他の作品をふれながら、比較文学

の見地から、『雁』と『金瓶梅』との関係をより綿密な考察によって、明らかにしていくものである。

キーワード 森鷗外 『金瓶梅』 『雁』 潘金蓮 西門慶

はじめに

『金瓶梅』は明の万暦（一五七三—一六二〇）中期、十六世紀の終わりに書かれた長編小説である。この作品は徹底したりアリズムの態度によるものであるが、その大胆な性表現ゆえに淫書とみなされ、たびたび発禁処分をこうむった。正保元（一六四四）年（注）に日本に入り、儒者の間に流行した。のち、「机下の書」でありながら、広く読まれていた。明治時代、尾崎紅葉は『金瓶梅』を種本として活

(注2) 用し、正岡子規の「蔵書目録」(注3)にその名が見られる。このような「金瓶梅」に、並はずれた漢学素養をもつ森鷗外がどうかかわっていたのかを考えるのがこの小論の目的である。

—

森鷗外は五歳の時から、漢籍の素読訓練を受けた。そして、六歳の時に『論語』を、七歳の時に『孟子』を、八歳の時に四書を習い、十歳の時、『左伝』・『国語』・『史記』・『漢書』を養老館で学んだ。つまり、鷗外は幼い時から漢学の教育を徹底的に受けた人だった。このような鷗外であるから、漢詩をたくさん書き、その中に「憶昔郷校講^二六經^一。羞我負^レ才又恃^レ齡^(注4)」の句がある。「独逸日記」における船の中の部分も全部漢文で書いている。

明治時代、洋学者を含んだ日本の文人は皆高いレベルの漢文教育を受けて、すぐれた漢学の素養をもっていた。浜野知三郎氏は鷗外の漢学に対する姿勢を左のように回憶している。

汗牛充棟、これぞ私が鷗外博士を訪問した時の第一の印象で今猶眼前に髣髴するものがある。そしてそれ

が一々綺麗に整頓してあり、其の大部分を占むるものは漢籍であつた。獨逸文學者としての博士、創作家としての博士、殊に醫學を専攻してゐる博士である。私の胸中には一種の疑問が起らざるを得なかつた。

博士は蘭學を修め、獨逸學を修め、佛蘭西學を修めて自他共に許すところがあつた。しかし其の修學の第一歩は漢學であつた。これが博士をして八面玲瓏の人たらしむる基礎となつたのだ。

或一青年が創作家になりたいといふ希望で教を博士に請ひに来た。博士は諄々乎として漢學の素養が第一條件であることを説かれた。これは丁度私が同席してゐたので、私も直接に其の話を聞き、博士が漢籍を嗜讀される理由が明瞭になつた。(中略)

博士の本領は醫學であり、獨逸文學である。しかし漢學が基礎であつたことを忘れてはならない。漢學の素養がなくては老後は淋しいものだと言々私に語られた。夫人にも漢籍の學習を勧められた。(注5)。

生々しく、いかにも明治時代における漢学素養の重要性、及び森鷗外のそれに対する重視の態度が躍然としてい

るのではなからうか。
森鷗外の学生時代の読書については、『鷗外全集』でも、

その他数多くの鷗外の伝記でも、それにかかわる記述が案外乏しいが、『キタ・セクスアリス』『雁』の中では、それをかなり詳しく書いてある。

『キタ・セクスアリス』『雁』の内容によれば、彼は中国古典文学作品『剪燈餘語』、『虞初新誌』、『情史類略』、『燕山外史』、『聊齋志異』、『水滸伝』、『西遊記』、『三国志演義』、『閱微草堂筆記』などをむやみに読み、「けしからん猥褻な本」である「肉蒲團」及び「金瓶梅」をも愛読した。彼は森田思軒・幸田露伴・尾崎紅葉・依田学海らとの合評「標新領異録」中に「好色一代女」の比較対象として「金瓶梅」を提起している。

ちなみに、鷗外の「觀潮樓偶記」の「猥褻」項には、「猥褻は感情的を避けて、觀相的に就く傾あるものにて、自然の模倣と相類す。(中略)東洋にて最之に近きは金瓶梅なるべし。猥褻は高致を以て出さず、憨態を以て之を出す」と書かれてある。これは鷗外の「金瓶梅」に関するリアリズム性の指摘とも言えよう。

しかし、「金瓶梅」にふれる場合、版本の問題を忘れてはならない。その版本には、大別して「詞話本」系と「第一奇書本」系がある。「第一奇書本」の系統のなかでは、清代の康熙年間、張竹坡がその本文に新しく批評を加えた新版が最も流行した。「第一奇書本」では西門慶が隣の花

子虚を誘って十兄弟に加盟させるところから話が始まるが、「詞話本」は「水滸伝」にもとづいて武松の虎退治から話を進めていくところが異なるくらいのものである。

日本では、江戸後期の訓詁抄本『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』が流行していた。筆者の調査したところ、今、東京大学も、武蔵大学も、鹿兒島大学も『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』を所蔵している。いずれも康熙三十四(一六九五乙亥)年の「序」がついている。ちなみに、芥川龍之介の愛読したのもそれである。

鷗外の愛読した『金瓶梅』は、東京大学付属図書館の鷗外文庫にある『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』(明笑笑生撰張竹坡評 百回無因湖南在茲堂 康熙乙亥刊版)であるので、以下はこの「第一奇書本」を使わせてもらい、話を進めていきたい。

では、鷗外はいつから『金瓶梅』を読み始めたかを考えておきたい。

鷗外自身の性生活史を述べたものである『キタ・セクスアリス』の中に、十四歳の時について、こう書いている。

日課は相變らず苦にもならない。暇さへあれば貸本を読む。次第に早く讀めるやうになるので、馬琴や京傳のものは殆ど讀み盡した。それからよみ本といふも

の中で、外の作者のものを讀んで見たが、どうも面白くない。人の借りてゐる人情本を讀む。何だか、男と女との關係が、美しい夢のやうに、心に浮ぶ。そして餘り深い印象をも與へないで過ぎ去つてしまふ。併しその印象を受ける度毎に、その美しい夢のやうなもの、容貌の立派な男女の享ける福で、自分なぞには企て及ばないといふやうな氣がする。^(注8)

『キタ・セクスアリス』や『雁』に描かれているのは青年期の鷗外像であるが、前田愛氏は東京大学付属図書館にある鷗外の蔵書を検証し、その中国小説類は『キタ・セクスアリス』の記述と吻合すると証明している。さらに、氏は次のように指摘している。

医学校予科の寄宿舎に入ったころから、貸本で京伝・馬琴・春水などの戯作小説に親しんでいた鷗外である。一、二年の間に「貸本文学の卒業者」となった彼が、漢文の読解力に自信を持つに従つて、中国の伝奇・小説へと、読書の世界を拡大して行ったことはきわめて自然である。^(注9)

森鷗外が医学校の予科に入学したのは明治七年であり、

医科大学を卒業したのは明治十四年であった。その頃の大学生の文学趣味は、漢詩文の習作と貸本文学の耽読という二つの要素を混在していたが、「槐南、夢香なんぞの香奩体の詩」を翫賞していた鷗外は独特な文学趣味をもっていたやうである。その「読書の世界を拡大して行った」鷗外は、「知らず識らずの間にその影響を受け」、十五歳になった時、文淵先生（依田学海）の所にゆき、漢文の批点を求めに至つたが、そこで彼が心を惹かれていたのは本物の『金瓶梅』であつた。

或日先生の机の下から唐本が覗いてゐるのを見ると、金瓶梅であつた。僕は馬琴の金瓶梅しか讀んだことはいないが、唐本の金瓶梅が大いに違つてゐるといふことを知つてゐた。そして先生なかなか油断がならないと思つた。^(注10)

右の文により、その時、鷗外はすでに「唐本の金瓶梅」と「馬琴の金瓶梅」の違いを知つていたのであるから、「容貌の立派な男女の享ける福」をのぞいて見たく、それを讀みたくなるのは当然のことである。『雁』の中で、次のよ
うな具体的な描写がある。

其頃神田明神前の坂を降りた曲角に、鉤なりに縁臺を出して、古本を曝してゐる店があつた。そこで或る時僕が唐本の金瓶梅を見附けて亭主に値を問ふと、七圓だと云つた。五圓に負けてくれと云ふと、「先刻岡田さんが六圓なら買ふと仰やいましたが、おことわり申したのです」と云ふ。偶然僕は工面が好かつたので言値で買つた。二三日立つてから、岡田に逢ふと、向うからかう云ひ出した。

「君はひどい人だね。僕が切角見附けて置いた金瓶梅を買つてしまつたぢやないか。」

「さうさう君が値を附けて折り合はなかつたと、本屋が云つてゐたよ。君欲しいのなら譲つて上げよう。」

「なに。隣だから君の讀んだ跡を貸して貰へば好いさ。」
僕は喜んで承諾した。(注11)

この一文から、「或る時」「唐本の金瓶梅」を見つけた「僕」の気持ち可以理解できるが、この描写により、実は當時における日本の『金瓶梅』に関する重要な情報を提供してくれている。内田魯庵の「社会百面相」に「君の戀愛小説なら」とワン之助君は微笑しつゝ、「主人公が金瓶梅の武大郎、西遊記の猪八戒といふ處だナ。」(注12)という描写もあるように、当時『金瓶梅』は明治文人の間に広く読まれ

ていたことがわかる。そして、「僕」が神田明神前の古本屋から金七円で「唐本の金瓶梅」を入手することになっているが、それは明治十三年のことであり、鷗外は十九歳だった。当時は、もり・かけそばの値段が一錢二厘の時代であつたのに対して、古本屋での『金瓶梅』の値段が六円、七円もするということから、当時の『金瓶梅』の人気ぶりと価値がよくうかがえよう。

二

『雁』は『青年』及び『灰燼』と共に森鷗外が試みた三編の長編現代小説の一つであり、名作である。

「この小説が、作家の青春の記憶とわかちがたく結ばれていた」(注13)ので、多くの論者の目を引いている。その中、『雁』の「巷」と「拾捌」「拾玖」の三章に、『金瓶梅』に関する内容があるから、『金瓶梅』にふれた論説も少なくない。昭和二十三年十月、三好行雄氏は新潮文庫『雁』「注」中において、金蓮を次のように解説している。

潘金蓮。『金瓶梅』(前出)のヒロイン。武大郎の妻で、たぐいまれな美人。西門慶と通じて夫を毒殺した。この三者の関係を岡田・お玉・末造の關係に見立てた

(注14)

三好行雄氏はいち早く潘金蓮・武太郎・西門慶を岡田・お玉・末造の関係に見立てているが、これの影響で、その後の研究者は大体この説に沿って『雁』の論考を展開している。

竹盛天雄の「『雁』について」は大変長い文章であるが、その中で『金瓶梅』に触れて次のように論じている。

共通の話題は共通の関心を示すものであり、それは「古本屋」趣味——「金瓶梅」——「窓の女」へとつながっている。(中略)『雁』の読者に見えていないかも知れぬが、二人には確実に見えているのだ。「壺」の末尾に姿を顕わした「金瓶梅」は、その後、裏側に隠れているが、「拾捌」「拾玖」の岡田の蛇退治の「話」において再度おもてに顕われる。すなわち『雁』の背後には、『金瓶梅』の色模様が見えつ隠れつしているのである。(中略)岡田みずからにはその意識がないが、「僕」の方には、明らかに『金瓶梅』の色模様への見立てがある。(注15)

竹盛天雄氏は『雁』の基底にある『金瓶梅』の力を強調

しているが、「見立て説」から離れていない。

千葉俊二氏の「『窓の女』考——『雁』をめぐる——」は〈窓〉の象徴性をホーフマンスタイルの「窓の女」及び『虞初新誌』の「小青伝」などのかかわりを論じたものであるが、『金瓶梅』との関連について、

この導入部に何気なく語られた「金瓶梅」のエピソードの重要性はそればかりではない。やがてストーリーが進展するにつれ、岡田とお玉がただ一度だけ言葉を交わす蛇殺しの場面を描いた「拾玖」では、お玉が潘金蓮に見立てられたりもするが、この「金瓶梅」は『雁』という物語の基底にあつて、その最も深い層から物語を支配する力を及ぼしているのだ。『金瓶梅』の潘金蓮もまたその物語の発端において一人の「窓の女」だったのであつてみれば、それは既に岡田とお玉の出遇いを描いたこの物語の書き出し部分にも大きな影を落としているといつていいだろう。(注16)

と語り、お玉が潘金蓮に見立てられていることにふれ、『雁』の書き出し部分にも『金瓶梅』の影があることを強調している。その全体は竹盛天雄氏の見解とはそれほど変わっていない。なお、氏の論文の中に『金瓶梅』をより細

かに論じたのは冒頭の部分である。

以上の三氏の見方は代表的なものであり、『雁』と『金瓶梅』とのかわりを「見立てたもの」であるという認識を土台に、彼らは「『金瓶梅』の色模様が見えつ隠れつしている」、「『金瓶梅』は『雁』という物語の基底にあつて、その最も深い層から物語を支配する力を及ぼしている」と、次から次へとその見解を補充し、充実させているが、いずれもそれを考えたものの、一歩踏み込んで、比較文学的な見地から『雁』と『金瓶梅』との関係を論じていない。

日本文学における中国古典文学の影響が極めて大きいことは周知の事実である。それについて、国木田独歩は「竹取物語は、わが國の物語中尤も秀でたるものなり。日本文學の精華として長く後代に傳ふべきものならん。唯惜むらくは、彼の構想或は支那の物語などに胚胎せしならんか^(注17)を」と、典型的な例を挙げてゐる。麻生磯次氏も「尚細かに見れば、孰れの作品にしても、支那文學と全然交渉をもたぬ作はないといつてよい」とその比較文學的研究の感想を述べている。このような背景の中において、「見立てたもの」とどまっては腑に落ちない。やはり、比較文學的な研究によつて、それを明らかにしていかなければならない。

三

『雁』中の主人公と『金瓶梅』の主要な登場人物との対応関係は「見立てたもの」関係ではなく、『金瓶梅』にある物語のパターンを鷗外がそのまま借りて『雁』を創作したものだと思ふ。

周知のように、『金瓶梅』は『水滸伝』の中の武松物語の一部分を敷衍した形になつてゐる。この部分は『金瓶梅』において、武松の虎退治、潘金蓮と西門慶との情事、潘金蓮の夫殺し、武松の流刑となつてゐる。この中、潘金蓮と西門慶との情事は『金瓶梅』中の第二回から第四回までに当たるが、具体的に言えば、『雁』の筋はその第二回「俏潘娘簾下勾情、老王婆茶坊説技」を中心に生かしたものだと思われる。

『雁』中のお玉は十六・七の娘で、「なんと云ふ美しい子」であつたが、妻子ある巡査に騙され、その後末造の妾になり、無縁坂の妾宅に囲われていた。末造は当時の人々に蛇蝎のように忌み嫌われる高利貸であつた。医学生岡田は「血色が好くて、体格ががつしりし」た美男であるが、上条に下宿していた。お玉は窓の外を定刻に散歩する岡田に心を引かれた。末造がお玉に買って来た紅雀を蛇が襲い、

通りかかった岡田が蛇を退治した。それ以来、岡田への思慕の情を押え難くなる。

以上は「雁」という作品中の大体の筋である。それを図式化すると、次のようになる。

薄幸な女性↓人のさげすむ男と一緒に↓置かれた現在の境遇に大きな不満を抱く↓無意識の願望↓理想的な男への慕情↓思いがけない形で願望を実現する

お玉の人生は、最初巡査に騙され、のち末造の妾になり、無縁坂の妾宅にいる日々も「無聊に苦しんで」おり、空閨に嘆くのである。総じて言えば、「雁」のお玉は薄幸な女として描かれている。一方、「金瓶梅」中の潘金蓮は二十五歳で、妖艶な美女である。西門慶も魅力的で、やはり群を抜いている男である。

潘金蓮はもともと南門外の藩仕立屋の娘であった。十五歳の時、張大戸の小間使いとなり、張大戸は金蓮に手をつけるが、のち、武大の嫁にやることとなった。毎日武大が出かけると、金蓮はおめかししては門口の簾のそばにただずんでいたが、ある日金蓮がちようど掛け竿を手にして簾をかけようとしていたところ、突然、風に掛け竿が吹き倒されてしまつて、ある男の頭巾にぶつかつてしまつた。そ

れが機縁で西門慶と知り合うことになる。

『金瓶梅』の作者は、驚くほど周到で緻密な頭脳でもつてこの作品を書いているが、この潘金蓮のそれまでの複雑な人生経路、西門慶との出会いの過程を図式化すると、左のようになる。

薄幸な女性（金持ちの主人張大戸は金蓮に手をつけるが、奥方に知られ、武大の嫁にやる）↓人のさげすむ男と一緒になる（三寸丁の穀樹皮）と言われ、蒸餅売りの武大）↓置かれた現在の境遇に大きな不満を抱く（武大をからすとみなす）↓無意識の願望（毎日門口の簾のそばにたたずみ）↓理想的な男への慕情（自宅に寄寓した弟武松に横恋慕する）↓思いがけない形で願望を実現する（掛け竿に当たつた機縁で西門慶と知合った）

『金瓶梅』中の潘金蓮は「思いがけない形で願望を実現する」が、西門家に入つてからも、経済的な裏付けのない潘金蓮が、大勢の女たちのひしめく西門家で他を圧する存在として、堂々と生きてゆくためには、西門慶を引きつけておくしか手がないのである。西門慶が新しい女に夢中になるたび、潘金蓮から遠ざかり、潘金蓮は空閨に嘆くのである。最後、例の武松に、その亡兄の霊前で血祭りにあけ

られた。潘金蓮の一生をみると、典型的な薄幸な女である。昔も、今も同じであるが、若い男女が関係を結ぼうとすれば、きつかけが欠かせない。きつかけを作るのに道具が必要となる。言うまでもなく、末造がお玉に買ってきた紅

雀を蛇が襲い、通りかかった岡田が蛇を退治したのは、お玉と岡田が知り合いになるきつかけである。でもそのきつかけを作った道具は「蛇」である。この仕組みも『金瓶梅』中にある。

先にも触れたように、『金瓶梅』の中において、風に吹き倒された「掛け竿」は道具である。この道具を取り纏まとめて話をもちかけ、金蓮と西門慶が知り合いになる。ゆえに「掛け竿」は極めて重要な道具である。この道具は、金蓮と西門慶とのその後のすべての話の展開のみならず、『金瓶梅』全体の構造ともつながっている。それが故に、森鷗外の愛読した「第一奇書本」中の該当箇所¹⁾に張竹坡はそれを「千古奇縁（とこしえの一回だけのご縁）」と評している。この忘れがたい「掛け竿」のイメージから、鷗外は敏銳な頭を働かせて、その棒状のイメージと似ている蛇を考え出し、そして、『金瓶梅』第一回「西門慶熱結十弟兄武二郎冷遇親哥嫂」中にある武松の虎退治の話²⁾を念頭に岡田の蛇退治の物語を創作したのではないかと思われる。その構図全体は明らかに同一である。（傍点筆者、以下同様）

以上はその筋の部分であるが、具体的なところまで見ると、一層明確になる。

『雁』は、「窓の女」とその前を通る書生の物語を基本構造としている。千葉俊二氏の言っているように『雁』のヒロインお玉は主人公の岡田にとつてその名前を知られることなく、常に『窓の女』として意識される³⁾が、西門慶にとつて、金蓮の名前を第四回で告げられるまでは、当然ながら「簾のそばにただずむ」「窓の女」として意識されなければならぬ。

窓の内では「無聊に苦んでゐる」お玉は、「それから毎日窓から外を見てゐるにも、又あの人が通りはしないかと待つやうになつた」としているが、これは『金瓶梅』にある描写で、金蓮が浮気心で、美しく化粧をして、門口の簾のそばにたたずんで、通りの男を物色するところから由来すると思われる。

続いて、岡田の「散歩」という設定を考えたい。

『雁』の中において、岡田は定期的に散歩するが、その道筋が『雁』において決定的な意味をもっている。でも、なぜ「散歩」でなければならないかと考える場合は、『金瓶梅』中にある西門慶のユニークな「散歩」が浮上してくる。それは、西門慶が周旋屋王婆の力を借りて、金蓮とつながる前の描写であり、第二回にある。西門慶は金蓮を何とかし

たいとあせつたので、金蓮の家の近くで繰り返し「散歩」をした。その中、

次日清晨、王婆恰纔開門、把眼看外時、只見西門慶又在街前来回躰走。

〔あくる朝、王婆が戸を開けて外を見ると、西門慶が早くも街を行ったり来たりしている。〕

良久、王婆在茶局裡冷眼張着、他在門前躰過東、看一看、又轉西去、又復一復、一連走了七八遍。

〔しばらくして、王婆が炊事場の中からじろりとのぞいて見ると、彼（西門慶）は店の前を行ったり来たり、あっちへ行つてちよつとのぞき、こっちへ来てちよつとかがい、つづけざまに七八遍も往復した。〕

など「散歩」に関する面白い描写がある。これは、西門慶が金蓮の家の前で掛け竿にぶつかってしまい、たぐいまれな美人である彼女のおもかげが脳裏に根をおろし、忘れられなく、いても立ってもいられない、思いは金蓮のことばかりの様子を描いている場面である。このようなすぐれた描写はだれが読んでも印象深く、「金瓶梅を読みさしたて」、「金蓮に逢つたのではないかと思」っている森鷗外は

なおさらであろう。結局、この部分も『雁』の重要な設定として生かし、『雁』における岡田の「散歩」を設定したのではないかと考えられる。

ちなみに、お貞はお玉の隣に住んでいる裁縫のお師匠であるが、『金瓶梅』第三回「定挨光王婆受賄、設圈套浪子私挑」に、王婆は金蓮と西門慶二人をつなぐ為、西門慶に次のような裁縫に関する話をしている。

大官人如幹此事、便買一疋藍紬、一疋白紬、一疋白絹、再用十兩好綿、都把來與老身。老身却走過去問他借曆日、央及他揀箇好日期、叫箇裁縫來做。他若見我這般說、揀了日期、不肯與我來做時、此事便休了；他若歡天喜地說：「我替你做。」不要我叫裁縫、這光便有一分了。

〔旦那がそれをおやりになるんですたら、紺羽二重を一疋、白羽二重を一疋、白絹を一疋、それからもう一つ上等な綿を百目買つて、それをみんな老輩にくださいます。そしたら、老輩は先方へ出かけていつて、こう言います、ちよいと、曆を貸してください、誰かに、日を選んでもらつて、仕立屋に縫い物を頼みますからつてね。あの子がそれを聞いて、日を選んでくれ

ても、縫い物ならしてあげると言ってくれなかつたら、この話はだめですが、あの子が大喜びで『わたし
が縫ってあげる』と言って、仕立屋を呼ばせないよう
なら、この話は一分の脈がありますよ。』

世の中に、さまざまな職業があるが、なぜお貞の職業は
「裁縫」でなければならぬか、これは無論偶然ではない。
さらに、細かいところまでいえば、お玉の女中は「梅」と
なっているが、金蓮付きの侍女は麗春梅であることをとり
あげることができる。

この二作品の関係は上述の内容にと留まらず、『雁』の
深層の問題までも『金瓶梅』に負っている。

『雁』の中に、お玉は旦那が商用で留守になり、それを
利用し岡田に誘いをかけようと決心したが、岡田はドイツ
人教授と一緒に洋行したため、その計画は妨げられてし
まった。仮に『雁』の進行方向にそって、密通できたら、
その結果は竹盛天雄氏の指摘しているように、「お玉が岡
田に接近しようとするものであるが、これは妾の檀那に対
する裏切りであり姦通に他ならない。」^(注20)のである。確かに、
岡田は知的エリートであり、お玉は無縁坂の妾宅に囲まれ
た妾である。二人の関係は正当な恋愛でもなければ、恋人
同士における愛情でもない。つまり、結果的に「姦通」に

関する話にならざるを得ない。前述したように、『雁』は
おもに『金瓶梅』の第二回「俏潘娘簾下勾情、老王婆茶坊
説技」を中心に生かしたものであるが、その第二回から第
四回までは真正銘の潘金蓮と西門慶の姦通をめぐるすく
れた文学描写といえる。

三好行雄氏は『雁』は「首尾の構成がかっちりしていて、
全体としてはむしろとりすました古典的な均整をたもち」、
「小説の独特の味わい」^(注21)があると指摘している。『金瓶梅』
は西門慶をとりまく欲望とエロスの世界を濃厚に描きなが
ら、物語を進めているが、その中に独立した物語ともいえ
るものもあり、第二回から第四回までの内容はその一つ
で、潘金蓮と西門慶の物語であり、全体性をもっている。
先述したごとく、けっして「見立てたもの」ではなく、『金
瓶梅』自体中国の古典文学作品であり、そして、その第二
回から第四回までの内容を生かしたものであるから、「古
典的な均整」をたもっている。すぐれた漢学の識見をもつ
森鷗外はそれを骨組みつくりの素材として発見し、『雁』
を創作したのではないかと思われる。

四

前文で、比較文学的な見地より、『雁』と『金瓶梅』と

のかかわりについて論じたが、作品『雁』には、他にも注目しなければならぬ箇所がある。

僕は岡田の話聞いて、單に神話らしいと云つたが、實は今一つすぐに胸に浮んだ事のあるのを隠してゐた。それは金瓶梅を讀みさして出た岡田が、金蓮に逢つたのではないかと思つたのである。(拾玖)^(注22)

今まで、この一文はあまり注目されてこなかったが、筆者は自分なりの見解を示しておきたい。

潘金蓮は『新編金瓶梅』、歌舞伎『雲妙問雨夜月』などによつて、毒婦、淫婦というイメージがその時代の日本人の脳裏に強く定着している。それがゆえに、日本の近代小説史を振り返つて見た場合、明治二十年の二葉亭四迷『浮雲』、山田美妙『武蔵野』から、昭和二十年の太宰治『竹青』、佐藤春夫『パリ島』の辺りまで、日本近代文学作品の中に潘金蓮に憧れる、或いは正面から彼女の名を取り上げてゐるものは一つもないのではなからうか。しかし、鷗外があえて彼女の名を作中に登場させたのは、若き鷗外が潘金蓮に対する憧れと好奇心を隠すことができなかつたからだろう。と同時に、彼は潘金蓮に対する独特の見方があつたと受け止めるしかない。

潘金蓮は欲望過剰のタイプであるが、『金瓶梅』中の最大のヒロインともいえる。『金瓶梅』世界における潘金蓮はけつして魅力がない人物像ではない。『金瓶梅』をよく読めば、金蓮は闘争精神があふれ、それなりの魅力があり、愛情ある女性でもあることが理解されよう。陳敬濟は論外としても、彼女は孟玉楼、龐春梅、小玉と良好な関係性をもっている。次に、金蓮と春梅の関係性をとりあげてみたい。

春梅はもともと呉月娘の侍女であつたが、金蓮が西門慶の屋敷にやつてくると、金蓮付きの侍女となる。彼女は身分こそ低い、誇り高く利口な美少女であつて、気骨がある。西門慶の死後、売りに出された春梅は周守備の妾となる。きれいで賢い彼女は周守備に愛され、まもなく第二夫人となつた。やがて周守備の夫人が亡くなり、春梅は長男金哥を産んだので、正夫人におさまつた。

日の出の勢いの春梅は金蓮が売りに出されたことを知ると、周守備にねだつて百両で買い入れるように頼みこむ。しかし、時すでに遅く、周守備の使者が値段の交渉に手間取つてゐるひまに、金蓮は武松の手にかかり、非業の死をとげた。それを知つた春梅は三、四日食事もとらずに泣きあかす。殺された後、金蓮の亡骸は誰も引き取り手がいないまま放置されていたが、春梅は周守備の部下、張勝と李

安に言いつけ、金蓮を南門外の永福寺に手厚く埋葬してもらった。第八十九回「清明節寡婦上新墳 永福寺夫人逢故主」に、三月の清明節に、春梅はおおぜいのお供を従え、金蓮の墓にやつてくる。

這春梅不慌不忙、来到墳前、擺了香、拜了四拜、說道……「我的娘、今日龐大姐特來與你燒陌紙錢。你好處生天、苦處用錢。早知你死在仇人之手、奴隨問怎的、也娶來府中、和奴做一處。還是奴耽誤了你、悔已是遲了。」説畢、令左右把錢紙燒了、這春梅向前放聲大哭不已。（春梅は慌てず騒がず落ち着いていて、墓前に進んで、香を焚き、四拜の礼を行なつてから、「お母さま、今日は龐春梅がわざわざあなたのために、紙錢を焼きに参つた。ご運がよければ、天に昇り、悪ければ、この錢をお使いください。あなたが仇敵の手にかかること分かつていたら、あたくしはどんなことがあつても、お屋敷に来てもらつて、一緒に仲良く暮せたのに。やっぱりあたくしの手違いだった。いまさら後悔しても及ばないげと……」）
 そう言うと、左右に命じて紙錢を焼かせ、さらに進み出て、大声をあげて泣き出した。）

このくだりの春梅の行動はまことに感動的で、心を打つものである。この二人は主従の仲とはいえ、本当に姉妹のような愛情によつて結ばれていたことがわかる。

日下翠氏は『金瓶梅——天下第一の奇書』の中で、潘金蓮を「魅力ある悪女^(注23)」と評価している。上述の管見を踏まえ、客観的に言えば、この評価は適当な評価だと言えよう。「雁」の中で、主人公の「僕」は『金瓶梅』に触れると、ただちに「すぐに胸に浮んだ事」として「金蓮に逢つたのではないか」と考えている。これは断るまでもなく、森鷗外が金蓮に対する見方と位置づけを「僕」に代弁させている。換言すれば、いちはやく、金蓮の「魅力ある」点を見出したのは森鷗外なのではないかと思う。

おわりに

澤田瑞穂氏は「日本では江戸末期に大衆作家の馬琴が自作に翻案して『新編金瓶梅』を出したのが、公然と『金瓶梅』を宣伝した唯一の例といつてよく『水滸伝』や『西遊記』ほど大衆に親しまれ、日本文学に影響を与えることはなかつた。」^(注24)と言っているが、その観点は検討すべきであろう。

前述したように、『金瓶梅』という中国古典文学作品は、

徹底したりアリズムの態度によるものであり、優れた文学描写として日本の明治以来の文人を魅了している。例えば、尾崎紅葉は『金瓶梅』を生かして、『三人妻』を創作した。芥川龍之介は厳しい検閲制度のために、『金瓶梅』を生かしていくことができなかったが、その死生観まで影響され、その作品の至るところにその影が見られる。^(注25)

今まで分析してきたように、森鷗外の場合も、その優れた漢文能力をもって『金瓶梅』をうまく消化し、作品創作に生かしたのである。

ただ、今まで日本文学における『金瓶梅』の影響はそれほど研究されていなく、その影響の深さもあまり理解されていないのでないかと思われ、筆者はこの小論を通して言いたいのである。

注

- (1) 長沢規矩也「我国に於ける金瓶梅の流行」(『書誌学』第二十卷第一号 一九三八年十二月 九頁)
- (2) 拙稿「尾崎紅葉『三人妻』と『金瓶梅』」(『日本語日本文学』第十八号 二〇〇八年三月)を参照されたい。
- (3) 『子規全集』(第十四卷 講談社 昭和五十一年一月 五三二頁)
- (4) 森鷗外が明治十三(一八八〇)年に書いた「庚辰歳旦醉歌」

による。

- (5) 『鷗外全集』第十九卷、岩波書店 昭和四十八年五月 五九一頁
この句からも、鷗外の漢詩に関する造詣の深さが窺える。
- (6) 浜野知三郎「鷗外博士の漢文學に就いて」
『森鷗外全集』別巻所収 筑摩書房 昭和五十一年八月 一五五頁
- (7) 『鷗外全集』(第二十四卷 岩波書店 昭和四十八年十月 五一二頁)
- (8) 日本近代文学館芥川龍之介文庫に『改過勸善新書(金瓶梅)』(巻一、十六、十六冊、康熙三十四序)が所蔵されている。
- (9) 『鷗外全集』(第五卷 岩波書店 昭和四十七年三月 二一頁)
前田愛「鷗外の中国小説趣味」
(前田愛『近代読者の成立』所収 岩波書店 一九九三年六月 七十六頁)
- (10) 『鷗外全集』(第五卷 岩波書店 昭和四十七年三月 四〇頁)
- (11) 『鷗外全集』(第八卷 岩波書店 昭和四十七年六月 四九五頁)
- (12) 『内田魯庵全集』(第十一卷 ゆまに書房 昭和六十一年八月 一七頁)
- (13) 三好行雄「雁」(『三好行雄著作集』第二卷 筑摩書房 一九九三年四月 八十九頁)
- (14) 三好行雄「雁」[注] (新潮社 昭和二十三年十二月 一

二二頁)

(15) 竹盛天雄『雁』について(『鷗外その紋様』所収 小沢書店 昭和五十九年七月 五九三頁)

(16) 千葉俊二『窓の女』考―『雁』をめぐって―(『森鷗外研究』所収 一九八八年五月 二八八頁)

(17) 『定本 国木田独歩全集』(第九卷 学習研究社 平成七年七月 六十七頁)

(18) 麻生磯次『江戸文学と支那文学』(三省堂 昭和二十一年 二四二頁)

(19) 注(16)と同じ 二十六頁。

(20) 注(15)と同じ 六一八頁。

(21) 三好行雄『雁』(『三好行雄著作集』第二卷 筑摩書房 一九九三年四月 九十四頁)

(22) 『鷗外全集』(第八卷 岩波書店 昭和四十七年六月 五七三頁)

(23) 日下翠『金瓶梅―天下第一の奇書』(中央公論社 一九九六年七月 三十一頁)

(24) 澤田瑞穂『金瓶梅』の研究と資料
〔中国の八大小説』所収 平凡社 昭和四十年六月 二六三頁)

(25) 芥川龍之介と『金瓶梅』との関わりについて、拙稿『芥川龍之介と『金瓶梅』』(『愛知大学国文学』第四十七号 平成十九年十一月)を参照されたい。

作品本文の引用は『鷗外全集』全三十八卷(岩波書店

昭和四十六〜五十年)に拠った。

参考文献

『芥川龍之介全集』(岩波書店 一九九五〜一九九八)

麻生磯次『江戸文学と支那文学』(三省堂 昭和二十一年)

『内田魯庵全集』(ゆまに書房 昭和五十八〜六十二年)

大阪市立大学中国文学研究室編『中国の八大小説』(平凡社 昭和四十年六月)

懷徳堂記念会編『中国四大奇書の世界』(和泉書院 二〇〇三年一月)

七月)

日下翠『金瓶梅―天下第一の奇書』(中央公論社 一九九六年)

七月)

『定本 国木田独歩全集』(学習研究社 一九九五〜一九九六)

『子規全集』(講談社 昭和五十〜昭和五十三年)

『新刻繡像批評金瓶梅』(上・下) (三聯書店(香港) 有限公司 一九九八年一月)

一九八七年五月)

日本書誌学大系51『日本近世小説と中国小説』(青裳堂書店 一九八七年五月)

一九八七年五月)

前田愛『近代読者の成立』(岩波書店 一九九三年六月)

三好行雄『三好行雄著作集』(筑摩書房 一九九三年四月)

(RUAN・YI、深圳大学副教授)